

宮澤賢治の“雨ニモマケズ”の組織化された構造

— 栄養療法の知的枠組についての研究 16 —

藤 井 義 博

The organized structure of *Miyazawa Kenji*'s “*ame ni mo makezu*”

— A study on the paradigms of nutrition therapy 16 —

Yoshihiro FUJII

Abstract

This study was an effort to demonstrate the organized structure of “*ame ni mo makezu*”, an unpublished notebook entry by *Miyazawa Kenji*. The results are as follows: the whole of “*ame ni mo makezu*” is an organization with three divisions each containing one theme phrase and four correlating phrases; in each division of “*ame ni mo makezu*”, all the four correlating phrases situated to the east, to the west, to the south, and to the north of the theme phrase make with the theme phrase *the theme correlating structure*, and the correlating phrase to the east and that to the west, and the correlating phrase to the south and that to the north make *the diagonal corresponding structure*; the three divisions of “*ame ni mo makezu*” have such similarity in structure that the three theme phrases make the homogenous structure called *the homogenous structure of theme phrases*, and the three corresponding phrases to the east, those to the west, those to the south, and those to the north make the homogenous structure called *the homogenous structure of correlating phrases*; in addition, between the three divisions, the correlating phrases to the east and those to the west, and the correlating phrases to the south and those to the north make *the diagonal corresponding structure between divisions*. Taking account of *the theme correlating structure* and *the diagonal corresponding structure* made new understanding of the phrases in each division possible; taking account of *the homogenous structure of theme phrases* allowed to identify the theme of the whole of “*ame ni mo makezu*”, and made new understanding of “*dekunobo*”(a good-for-nothing) possible; and taking account of *the homogenous structure of correlating phrases* and *the diagonal corresponding structure between divisions* made extended understanding of the correlating phrases possible. A new approach with a viewpoint of the organized structure to *Miyazawa Kenji*'s works may promise to open the door to new understanding of them.

所属：

藤女子大学人間生活学部食物栄養学科、人間生活学研究科食物栄養学専攻

Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Sciences, and Division of Food Science and Human Nutrition, Graduate School of Human Life Science, Fuji Women's University

1. はじめに

宮澤賢治（1896～1933）は、日本を代表する詩人・童話作家として現代では国際的に知られるようになったが、生前には2つの著作だけを刊行している。すなわち心象スケッチ「春と修羅」の自費出版（1924年4月）および「水仙月の四日」を含む9篇の童話からなる童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の刊行（同年12月）である。賢治の手記「雨ニモマケズ」は、1931年11月3日の日付のもとに「雨ニモマケズ手帳」（注：1931年秋の帰郷後間もなく病床で書きはじめられた賢治の手帳）の51ページから59ページにわたって記された文であり、遺書と共に賢治の死後に発見された。すなわち「雨ニモマケズ」はタイトルではなく、記された文の冒頭の1行である。「雨ニモマケズ」が、広く一般に知られるに至った理由には、とりわけ1944（昭和19）年9月、谷川徹三が東京女子大学で「今日の心がまえ」なるテーマで行った「雨ニモマケズ」を中心とした賢治に関する講演と、翌年6月は当時の国策協力の出版「日本叢書」（生活社刊）4として「雨ニモマケズ」の書名で初版2万部が発行されたことが挙げられる¹⁾。

2. 仮説と方法

「雨ニモマケズ」は、他の作品とは全く異なり、決して他人に見せる為に書いたものではないことは、谷川徹三や小倉豊文など賢治発見者・研究者の共通する認識である。そして、谷川が述べるように、「雨ニモマケズ」が、全く自分のためだけに書いたものであり、その意味では「願いであると共に祈り」であったとしても²⁾、だからといって「雨ニモマケズ」が作品への発展性のない単なる私的な願いや祈りを記しただけのもではなかったように思われる。なぜなら同じ「雨ニモマケズ」手帳の71ページから74ページにかけて、「土偶坊」とタイトルのもとに第1景から第11景の見出しが記されたメモがあり、サブタイトルには「ワレワレカウイフモノニナリタイ」とあるからである。つまり小倉が指摘するように¹⁾、「土偶坊」は、「デクノボウ」と読ませるつもりであり、11月3日の手記「雨ニモマケズ」のテーマの劇化を志向したものであると思われる。このことは、「雨ニモマケズ」の意義を狭く解釈しすぎてはいけないうことを示しているように思われる。つまり「雨ニモマケズ」は、作品のテーマとして発展することができるほど、賢治の心の中において明確に構成された思念であったこと、すなわち「雨ニモマケズ」は賢治の思念のエッセンスそのものではなかったのか。

谷川は、上述した東京女子大学で行った講演のなかで、「雨ニモマケズ」を「明治以来の日本人の作った凡ゆる詩の中で、最高の詩であると思っています」と絶賛するとともに、「その精神の高さに於いて、これに比べ得る詩を私は知らないのであります」と述べて、その絶賛の理由を示している。そして『「雨ニモマケズ」の詩は、賢者の文学としての賢治の文学の特色を、最も純粹に最も高い精神で打ち出したものであると私は考えております」と述べる。しかし谷川は「雨ニモマケズ」が実際にどのように「最も純粹に最も高い精神で打ち出したもの」であるかについては黙したままである。そして谷川は、1959年（昭和34年）5月の平泉中尊寺における賢治詩建立記念講演において、「雨ニモマケズ」の修辞が型にはまっているという批判に対する反論を述べ、「一つ一つの言葉は素朴な類型的表現の中に象徴的含蓄をもっている」こと、「その古風な修辞法の中にこの詩の今日における新しさがある」こと、「近代的個人主義文学におけるような発想と措辞を斥けたところに、この詩の精神の高さがある」こと、「ここには近代的現実感がないところに独自の超現実的現実感があって、その切実性がわれわれの心を動かす（注：傍点引用者）」ことを指摘している²⁾。しかし谷川は、「今日における新しさ」、「独自の超現実的現実感」をもたらすものが何であるかを一切明示していない。そのかわりに、傍点を付けて示したように、それらが、「の中に」、「を斥けたところに」、「がないところに」あることを暗示しているだけである。このように、谷川は、「雨ニモマケズ」の中に、「精神の高さ」や「切実性」を感じて心を動かされたと述べるが、その彼の心を動かしたものが具体的に何であるかについては一切語っていない。

「雨ニモマケズ」は賢治の思念のエッセンスそのものであるならば、その思念は何らかの構造をもっているはずである。本論文は、「雨ニモマケズ」には組織化された構造があると仮定して、それを実証する

試みである。結論を先取りして言うならば、「雨ニモマケズ」における個々のフレーズは、組織化された構造に注目すると新たな理解をもたらすようになる。それゆえに「雨ニモマケズ」の組織化された構造を考慮することなく、これらの個々のフレーズだけに焦点を当てると、「素朴な類型的表現」あるいは「古風な修辞法」を用いた表現であると見誤ってしまう。そして「雨ニモマケズ」の組織化された構造は、まさに「近代的個人主義文学におけるような発想と措辞を斥けたところ」に見出され得る構造である。なぜならこの構造は、近代的個人主義文学の理念に基づいた構造ではなく、むしろ進化論的な構造であり、生物的不いしは生理的構造であるからである。本論文は、谷川によって、「今日における新しさ」、「独自の超現実的現実感」をもたらすものが、「の中に」、「を斥けたところに」、「がないところに」あると暗示されているもの、それが「雨ニモマケズ」の組織化された構造であることを実証する試みである。

3. 資料

宮澤賢治の手記「雨ニモマケズ」のテキストとして、「新校本宮澤賢治全集」第13巻（上）覚書・手帳本文篇（筑摩書房、1997年）を用いた。

4. 「雨ニモマケズ」の組織化された構造

「雨ニモマケズ」は、青鉛筆での横書きの11月3日を意味する「11、3」のもとに、縦書きの鉛筆書きで記されている。表記上は、とりわけ何らかの区画の存在をうかがわせるような区切りや間隔のようなものはない。しかしながら「雨ニモマケズ」には相互に関連する3つのテーマがあり、このテーマに従って「雨ニモマケズ」は3つの区画からなると考えられる。以下に、この「雨ニモマケズ」の区画、区画の範囲、区画ごとのテーマフレーズと区画のテーマを記す。

第1区画

範囲：「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル 一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ
アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」
テーマフレーズ：「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」
テーマ：菜食への祈り

第2区画

範囲：「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ 小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ 東ニ病氣ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ 南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ 北ニケンクワヤソショウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」
テーマフレーズ：「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ 小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ」
テーマ：大自然の中でのつつましい居住への祈り

第3区画

範囲：「ヒドリノトキハナミダヲナガシ サムサノナツハオロオロアルキ ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ クニモサレズ サウイフモノニ ワタシハナリタイ」
テーマフレーズ：「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」
テーマ：そういうものになることへの祈り

次章において、第1区画のテーマフレーズを想定した根拠について述べる。そして第1区画のテーマフレーズが確定すると、第2区画および第3区画のテーマフレーズが自ずと決まってくる組織化された

構造があることについて述べる。

5. 第1区画のテーマフレーズを同定した根拠

5.1. 「雨ニモマケズ」における「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」の位置づけ

上述したように、「雨ニモマケズ」は、相互に関連する3つのテーマフレーズを含む3区画からなる構成をとっていると考えられる。ここでは、第1区画のテーマフレーズは、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」であると想定する。そうするとこのテーマフレーズから想定されるテーマは、「菜食への祈り」となるであろう。しかしながら、従来の「雨ニモマケズ」についての論考では、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」を「雨ニモマケズ」のテーマにかかわるキーフレーズと把握するものはほとんどない。その理由は、「雨ニモマケズ」では、最後のフレーズの「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」が唯一のテーマであり、「ミンナニデクノボートヨバレ」を含む全てのフレーズがここに収束するという前提があるからだと思われる。実際、「雨ニモマケズ」を「食」という観点から論考した廣瀬正明は、「雨ニモマケズ」についての論考には数え切れないくらい多くのものがあるが、それらは、デクノボーをめぐる仏教論や詩の価値についての文学論がほとんどであることを指摘している。そして「『食』という、すぐれて形而下の世界にかかわる議論は、ほとんど目にする事ができない」と述べている。さらに廣瀬は、「食」という観点から「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」というフレーズについて論考している。その中で、「雨ニモマケズ」が書かれた時期の賢治は、玄米食の効能を全く認めていなかったが、孝行のために折れそうな心を克服しようとする懸命の思いが、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」と書かせ、そして「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」と記させた最も強い動機であったことを指摘する。そして、さらに言えば、それが「雨ニモマケズ」そのものの成立条件であった可能性も否定できないと述べる³⁾。「雨ニモマケズ」の成立条件についての諸資料の正確な解釈に基づいた近代科学的論考による結論として、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」が、「雨ニモマケズ」にとって必要不可欠なフレーズであると位置づけられたことは、「雨ニモマケズ」についての論考の歴史において画期的なことである。しかしながら廣瀬は、「雨ニモマケズ」という思念の構造において、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」のフレーズが、「雨ニモマケズ」の最後のフレーズである「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」とどのように関係しているのか、さらには「雨ニモマケズ」の全体においてこのフレーズがどのような位置づけにあるのかについては、ほとんど何も述べていない。廣瀬は、「雨ニモマケズ」の表現に影響を与える外部環境の変化と「雨ニモマケズ」表現における反応の関係をとらえようとしているが、「雨ニモマケズ」の内部構造の把握を目的とはしていない。この廣瀬の外部環境の影響を論考する立場と対比して言うと、本論は、そのような外部環境の影響下において、「雨ニモマケズ」がどのように自己組織化されているかを検証することである。それは、家族を含む人間関係や知的刺激を含む外部環境に影響されて受動的に反応する賢治が、なぜ「雨ニモマケズ」を記したのかを論考することではない。むしろそれは、外部環境の影響下、積極的に自己組織化する主体である賢治が、どのように残り幾ばくもない将来に向かって、構造化された思念を形成していたかを「雨ニモマケズ」の中に見出す試みである。

5.2. 「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」についての栄養学的評価

「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」を本論のように「雨ニモマケズ」の第1テーマ（菜食への祈り）の基となるテーマフレーズとするのかあるいはしないのかは、このフレーズをどのように把握するかにかかっている。例えば、高村光太郎は、賢治が「立派な科学者であった」ことに鑑み、「玄米四合」は、日本人一般の食水準における「最低量」とであると推定した。廣瀬は、「『玄米四合』だけを取りあげると、そのカロリーは、約2100キロカロリー、蛋白質は約60グラムとなり、現代の成人男子の所要量の目安とされる蛋白質60グラムは満たすが、2600キロカロリーには不十分である」と判定した³⁾。一方、渡邊 昌は、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」を、玄米600g、米味噌21g、か

ぶ10 g、たまねぎ20 g、さつまいも20 g、梅干し10 gとして、1日のエネルギー摂取量と栄養素摂取量を2199 kcal、タンパク質44.2 g、脂質17.6 g、炭水化物456.9 gであり、ビタミンCを除いてビタミン、ミネラルを含む栄養素量は食事摂取基準を全て上回っていると報告した⁴⁾。また、筆者は、前著において、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」についての臨床栄養学的評価を行い、栄養摂取量と身体活動のバランスが取れていることを報告した。すなわち「雨ニモマケズ」を記した実際の賢治は結核の末期の状態にて病床にあったが、「雨ニモマケズ」の活動が十全にできる状態を鑑みて、やや痩せ気味の30歳代男性として体重を想定し、性別年齢群(30~49歳男)の基礎代謝基準値を用いて、その賢治の基礎代謝量を算出し、「雨ニモマケズ」に記載された活動状態より、日常生活活動レベルを推定した結果、賢治のエネルギー必要量を算出した結果、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」の食事は、「雨ニモマケズ」の賢治のエネルギー必要量を満たしていることを示した⁵⁾。

「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」の食事におけるビタミンCの不足は、賢治の当時の最新の栄養学の知識を以ってしてもやむを得なかったことと判断される。なぜなら「雨ニモマケズ」が記されたのは1931年であるが、ビタミンCの構造式が決定され、アスコルビン酸と命名され、またビタミンCの合成に成功したのが1933年すなわち賢治の亡くなる年であったからである。そうすると「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」の食事は、高村が推測したように、日本人一般の食水準における「最低量」を示すものではなく、また、廣瀬が示したように栄養学的には現代の成人男子のカロリー所要量には足りないかもしれないが、臨床栄養学的には「雨ニモマケズ」に記載された賢治の生活のエネルギー必要量を満たしていることが示唆される。このように、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」のフレーズは、「雨ニモマケズ」の第1区画のテーマフレーズとするに足だけの臨床栄養学的な妥当性を有していると判断される。そしてこの臨床栄養学的根拠に基づくことにより、菜食への祈りをテーマとして第1区画を分節することも、臨床栄養学的に妥当なものになるであろう。

このように、フレーズ「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」の第1区画における位置が定まり、菜食の祈りを第1区画のテーマとすることが妥当なものになった今、「雨ニモマケズ」における他の2つのテーマフレーズおよびそれに基づくテーマが自ずと見えてくる。そこで、次章では「雨ニモマケズ」の各区画における区画内構造として、各区画がいかにテーマフレーズを中心に組織化された構造を有しているかを検証する。

6. 「雨ニモマケズ」における各区画内の組織化された構造

「雨ニモマケズ」は、各区画に5つのフレーズを含む3つの区画からなる組織体(organization)であると考えられる。図1に示すように、この組織体の3つの区画は、すべて、ひとつのテーマフレーズと4つの相関フレーズからなる。そして各区画内では、テーマフレーズを中心に4つの相関フレーズが東・西・南・北から取り囲むことで「テーマ相関構造」を形成する。また、図2に示すように、東西の相関フレーズと南北の相関フレーズが、それぞれ「対角照応構造」を形成する。

6.1. 各区画内の「テーマ相関構造」と「対角照応構造」の意義

テーマフレーズを取り囲んで東・西・南・北の区画内構造を形成しているという本論のアイディアは、第2区画の4つの相関フレーズが東西南北の修辭を用いて表現されていることに由来する。すなわち「東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ 南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ 北ニケンクワヤソショウガアレバ ツマナイカラヤメロトイヒ」の表現は、これらを修辭的表現と把握する限り、「修辭が型にはまっている」、「經典や叙事詩の修辭法をとっている」、「素朴な類型的表现」、「古風な修辭法」という解釈になるであろう。しかしながら、「雨ニモマケズ」がそれぞれひとつのテーマフレーズとそれに関連する4つの相関フレーズからなる3区画構造をもっていると仮定するならば、この東西南北のいわゆる修辭的表現は、別の解釈が可能になる。それは、これらのフレーズがテーマフレーズ「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ 小サナ萱ヅ

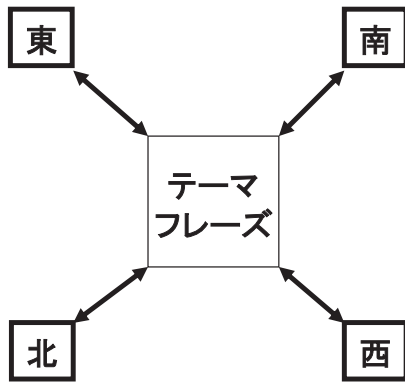


図1. 「テーマ相関構造」

各区画内におけるテーマフレーズと東・西・南・北に位置する4つの相関フレーズとが形成する相互関係の構造

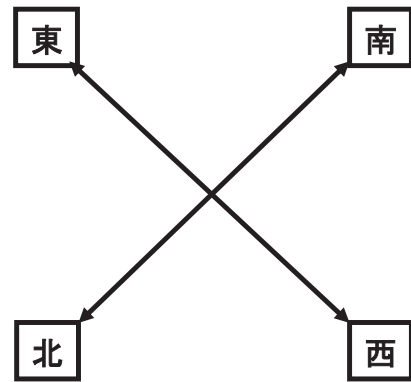


図2. 「対角照応構造」

各区画内における東西の相関フレーズと南北の相関フレーズが形成する照応の構造

キノ小屋ニキテ」を中心に東西南北という空間構造をもっていると把握することである。そして第1区画と第3区画においても、それぞれ4つの相関フレーズがあり、それらは同じくテーマフレーズを中心に4つの相関フレーズが東西南北の空間構造を持っていると解釈することである。そうであれば、第2区画の東西南北を用いた表現は、単なる修辭的表現ではなく、「雨ニモマケズ」の各区画が東西南北の空間構造を持っていることを知らせるために敢えて「古風な」修辭法を用いた寓意的表現といえることができる。

テーマフレーズを中心とした4つの相関フレーズの東・西・南・北による各区画の区画内構造においては、各相関フレーズとテーマフレーズの関係は2つの構造をもつ。ひとつは、各相関フレーズとテーマフレーズの二方向性の関係である。すなわちテーマフレーズと個々の相関フレーズの関係が、相互に原因および結果になるという関係である。もうひとつの構造は、テーマフレーズを挟んで相関フレーズが東西及び南北の対構造をなすということである。そこで本論においては、各区画のテーマフレーズを、それぞれテーマフレーズ1、テーマフレーズ2、テーマフレーズ3と呼び、各区画の相関フレーズをそれぞれ、東1西1南1北1、東2西2南2北2、東3西3南3北3と呼ぶ。そうすると「雨ニモマケズ」の区画内構造は以下のように表現することができる。

第1区画（テーマ：菜食への祈り）

テーマフレーズ1：「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」

東1：「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」

西1：「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル」

南1：「アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ」

北1：「ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」

第2区画（テーマ：大自然の中でのつつましい居住への祈り）

テーマフレーズ2：「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ 小サナ萱ブキノ小屋ニキテ」

東2：「東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ」

西2：「西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」

南2：「南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」

北2：「北ニケンクウヤソシヨウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」

第3区画（テーマ：そういうものになることへの祈り）

テーマフレーズ3：「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」

東3：「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」

西3：「サムサノナツハオロオロアルキ」

南3：「ミンナニデクノボートヨバレ」

北3：「ホメラレモセズ クニモサレズ」

次節において、各区画内の「テーマ相関構造」と「対角照応構造」に基づく「雨ニモマケズ」の各区画のフレーズの理解がどのように明確になるかについて述べる。

6.2. 各区画内の「テーマ相関構造」と「対角照応構造」に基づく「雨ニモマケズ」の理解

(1) 第1区画の「テーマ相関構造」と「対角照応構造」に基づく第1区画の理解

第1区画のテーマは「菜食への祈り」である。テーマフレーズ1と4つの相関フレーズ（東1、西1、南1、北1）は二方向の関係をもっているならば、この祈りにも二方向性を読み取ることになる。それは、一方では、菜食により、身体的に丈夫になり、精神的に安定して利他的、傾聴的になることへの祈りである。すなわち「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」で、「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」、「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル」ように、また「アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ」、「ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」という状態になることへの祈りである。それは、他方では、「玄米四合」を食べることができる身体の丈夫さと精神的な安定性を持つことへの祈りでもある。すなわち「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ」られるよう、「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」、「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル」こと、「アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ」いること、「ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」にすることへの祈りである。

このうち菜食により身体的に丈夫になることへの祈りは、上述したように、ビタミンCの発見以前という歴史的な状況においてその菜食の内容は臨床栄養学的に妥当であることから、決して虫がいい祈りではない。それは、為すべきことをすべて行っただけの謙虚な祈りである。また、この菜食にて精神的に安定することへの祈りに関しては、賢治のビヂテリアン大祭における主張の「^{すなわ}則ち享樂は必ず肉食にばかりあるのではない。寧ろ清らかな透明な限りのない愉快と安静とが菜食にあるということを申しあげるのであります」⁶⁾と矛盾しないことから、決して虫がいい祈りではない。これは、観察に準拠したうえでの慎ましい祈りである。

臨終期の賢治が玄米四合を食べられることをなぜ祈ったのだろうか。それについては、玄米四合の意味は、それで丈夫な体をつくるためだけではなく、もはや病床を離れることのできなくなった賢治が、残された時間のなかで最後の力をふりしぼって自らの使命をまっとうしようと、玄米四合を食べても下痢しない程の丈夫な体であることをも祈ったと解釈される⁷⁾。また、賢治はどうして白米食ではなく、玄米食を記したのかについては、家中の健康を願って玄米（七分搗）食が採用されていたことに加えて⁷⁾、雨ニモマケズ手帳の44ページから45ページに、「厳に 日課を定め 法を先とし 父母を次とし 近縁を三とし 農村を 最後の目標として 只猛進せよ 利による友、快樂を同じくする友尽く 之を遠離せよ（傍点引用者）」とあるように、賢治の決めた上記の原則の実行であると思われる。

東1西1の対構造は、心身の相関を主張する。南1北1の対構造は、無私状態で傾聴することが相手の理解と将来に備えた記憶につながるための祈りでもあることを明確にする。

(2) 第2区画の「テーマ相関構造」と「対角照応構造」に基づく第2区画の理解

第2区画のテーマは「大自然の中でのつつましい居住への祈り」である。テーマフレーズ2と4つの相関フレーズ（東2、西2、南2、北2）の相互的な因果関係は明白である。ここでの祈りは、一方で

は、大自然の中でのつつましい居住によって、東西南北の利他的行為ができることへの祈りであり、他方では、このような東西南北の利他的行為が、大自然の中でのつつましい居住を可能にすることへの祈りである。後者の祈りは、「雨ニモマケズ手帳」の表現によれば、「唯諸苦ヲ抜クノ大医王タレ」と自らに決意する社会的実践者の賢治が農民との間にいかに独善的になることなく持続可能な実践ができるかを踏まえた表現であると思われる。

東2西2の対構造は、疾患や障害を持っている子と母という母子関係への言及である。南2北2の対構造は、死を喧嘩や訴訟と対比する。この対比において喧嘩や訴訟では和解が困難であるように、恐れが死との和解を困難にしていることが示唆される。

(3) 第3区画の「テーマ相関構造」と「対角照応構造」に基づく第3区画の理解

第3区画のテーマは「そういうものになることへの祈り」である。テーマフレーズ3と4つの相関フレーズ（東3、西3、南3、北3）の相互的な因果関係に基づく祈りは、一方では、「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」ために、「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」、「サムサノナツハオロオロアルキ」、「ミンナニデクノボートヨバレ」、「ホメラレモセズ クニモサレズ」に在ることへの祈りである。これは決意に基づいて演繹的な行動ができることへの祈りである。また、他方では、「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」、「サムサノナツハオロオロアルキ」、「ミンナニデクノボートヨバレ」、「ホメラレモセズ クニモサレズ」に在ることが、「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」との決意につながることへの祈りでもある。これは行動の事実が、帰納的に決意にフィードバックされることへの祈りである。

東3西3の対構造は、早魃と冷夏という夏の2つの災害の対比である。南3北3の対構造は、「ミンナニデクノボートヨバレ」ることは、役立たずということではないことの表明である。それは、空気のようにみんなに必要であり、「ホメラレモセズ クニモサレズ」当たり前と思われる存在になることへの祈りの強調である。

7. 「雨ニモマケズ」における区画の枠を超えた相同構造

それぞれのテーマを中心に構成されている「雨ニモマケズ」の各区画は、またそれぞれが有機的なつながりを持っている。第1区画のテーマ「菜食への祈り」が、第2区画のテーマ「大自然の中でのつつましい居住への祈り」に進展し、さらには第3区画のテーマ「そういうものになることへの祈り」へと進展するという構造を持っている。そしてこのような区画にまたがる構造の原則について、賢治は区画内構造の相同性（homogeny）と把握していたと思われる。

相同性とは、進化論的概念であり、例えば、魚類の胸鰭、鳥類の翼、人間の上肢の間における器官原型の同一性である。つまり、テーマフレーズを中心とした4つの相関フレーズの東西南北の空間的配置（「テーマ相関構造」）が、器官原型である。喩えるならば、それが第1区画（菜食への祈り）では魚類の鰭になり、第2区画（大自然の中でのつつましい居住への祈り）では鳥類の翼になり、第3区画（そういうものになることへの祈り）では人間の上肢となる。

そして器官における相同が、魚類の鰭、鳥類の翼、人間の上肢の器官を構成するそれぞれの組織の間における相同であるように、このようにテーマフレーズ1、テーマフレーズ2、テーマフレーズ3が、相同性に基づいて区画の枠を超えた相同構造を形成する（これを「テーマフレーズの相同構造」と呼ぶ）。また、各区画内の東西南北の空間構造は、区画の枠を超えて、3つの区画における東同士、西同士、南同士、北同士が、それぞれ区画をまたいで相同構造を形成する（これを「相関フレーズの相同構造」と呼ぶ）。さらには区画内の東西間、南北間における対角構造（「対角照応構造」）があるように、区画間においても東西および南北の間に対角構造を形成する（これを「区画間の対角照応構造」と呼ぶ）。

8. テーマフレーズの区画を超えた相同構造：「テーマフレーズの相同構造」

8.1. 「テーマフレーズの相同構造」と衣食住

「テーマフレーズの相同構造」(図3)に基づく、各区画のテーマと衣食住との関係を見て取ることができる。第1区画のテーマ「菜食への祈り」は食、第2区画のテーマ「大自然の中でのつつましい居住への祈り」は住である。ところが第3区画のテーマである「そういうものになることへの祈り」は、具体的な衣料が出てこないことから、直ちに衣とは言いがたい。しかし衣食住を「生活を立て行くこと」(広辞苑 第1版)と理解すると、「そういうものになることへの祈り」は、この「生活を立て行くこと」への祈りになる。この意味において、「そういうものになることへの祈り」は、生きていくうえでの精神的な衣ということができる。そうであれば、「雨ニモマケズ」の3つのテーマは、それぞれ食、住、衣(精神的な衣)を表わすことになる。このように「雨ニモマケズ」のテーマフレーズの区画を超えた相同構造は、衣食住である。

しかしその構造の実際の展開は、衣・食・住ではなく、食・住・衣である。どうしてこのような順序の相同構造なのか。それは、賢治の生活法つまり生活の原則の順序を示しているからと思われる。その順序に関して、賢治は「雨ニモマケズ手帳」の、1931年10月29日の日付のもとに「疾すでに治するに近し」で始まる41ページから46ページにわたって記された文において、「厳に 日課を定め 法を先とし 父母を次とし 近縁を三とし 農村を最後の目標として 只猛進せよ 利による友、快樂を同じくする友 尽く之を遠離せよ(傍点引用者)」と述べている。これは「雨ニモマケズ」を書いた頃の賢治の生活法である。その中の「日課を定め」が「雨ニモマケズ」の第1区画の食と第2区画の住のテーマに対応している。そして「農村を最後の目標として」が、第2区画の住と第3区画の精神的衣としての衣のテーマに対応している。

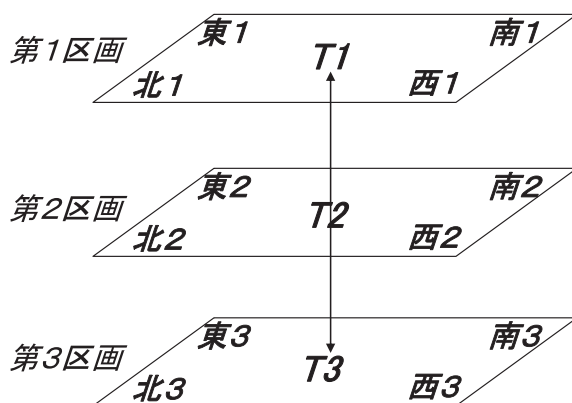


図3. 「テーマフレーズの相同構造」
各区画内におけるテーマフレーズ(T1、T2、T3)が区域を超えて形成する相同的な構造

それでは賢治はどのように精神的な衣を身にまとうことを祈ったのであろうか。この点に関して、賢治の生まれる34年前に賢治と同じ岩手県に生まれ、奇しくも賢治と同じ1933年に没した新渡戸稲造(1862～1933)(以下、稲造と呼ぶ)の衣類についての評価が示唆を与えてくれる：「西洋人は、自分のために衣類を選び、好む物をつけるが、日本人は人が言うから、人のために衣類の好みをいろいろに変える。いろいろな会合を催しても、日本の婦人の寄りが悪いが、その主な理由は着物である。紋付の着物を着るか、あるいは縞の着物を着て出るか、会合に出てきた人と違うことが大きな負担になって、お互いに出られなくなる。それは、標準を外においているから自信がないのである。多くの人の言うに任せ、

世間でこういえばかう、ああいえばああという。我は我たりという強いところもなければ、己を信ずるところもなければ、更に己の意見を主張する勇氣も持たない。これは己というもののディグニティー(尊厳)を顧みないことであり、根柢において、やや奴隷に近いやうな心持がする。」⁸⁾ この稲造による日本人の衣類観に基づけば、衣食住という順番こそが「標準を外にしているから自信がない」日本人を特徴付けているのではないかと理解することができる。そうであれば、「雨ニモマケズ」の食・住・衣(精神的衣)の順序は、賢治の生活法の特徴を如実に示す順序である(図4)。

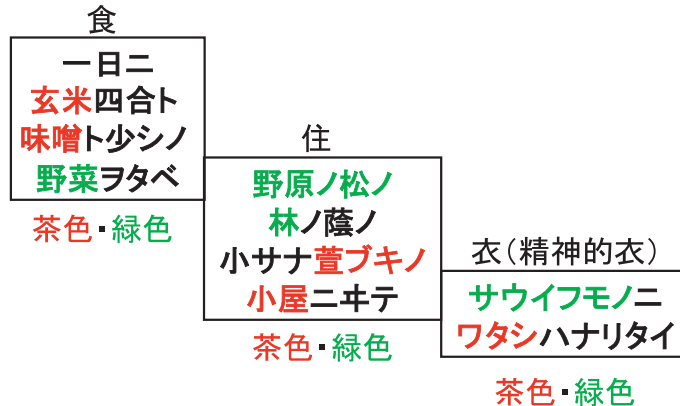


図4. 「雨ニモマケズ」の3つのテーマフレーズと衣食住の関係

8.2. 「テーマフレーズの相同構造」に基づく「デクノボー」の理解

テーマフレーズ1、2、3が相同的な構造を示すとすると、その相同性によってテーマフレーズ3のもつ意味をより明確にすることができるであろう。そしてその相同性には、テーマフレーズの色彩が含まれると思われる。なぜならテーマフレーズ1、2の相同的な構造には、緑色と茶色の2つの色彩の対が存在する。すなわちテーマフレーズ1では、「玄米」と「味噌」が茶色、「野菜」が緑色である。テーマフレーズ2では、「野原」と「松ノ林」が緑色であり、「萱ヅキノ小屋」が茶色である。

これらの相同的な色彩の対構造において、自然物が「緑色」、自然の加工物が「茶色」という特徴を共通している。そうであれば、テーマフレーズ3の「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」の色彩も、自然物が緑色で自然の加工物が茶色となる。そうすると、「ワタシ」が茶色、「サウイフモノ」が緑色になる。第3区画における「サウイフモノ」は、東3の「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」、西3の「サムサノナツハオロオロアルキ」、南3の「ミンナニデクノボートヨバレ」、北3の「ホメラレモセズ クニモサレズ」という状態である。これらはすべて、「ワタシ」の状態よりも、より自然体の状態である。

この自然体の状態に関して、賢治の「雨ニモマケズ手帳」1)の中に1931年10月29日の日付の「疾すでに治するに近し」で始まる文において、「つまらぬ見掛け 先づを求めて 以て—せん」といふ風の 自欺的な行動 に寸毫も委するなく」とあることが注目される。なぜならここには、自然体への決意を読み取ることができるからである。このような理由で、「ワタシ」よりもより自然体の「サウイフモノ」は、緑色がふさわしいように思われる。そして緑色がふさわしい自然体の「サウイフモノ」は、農村においては、農民に踏み固められることによってその構造の維持に何らかの意味で寄与している田の畦道の雑草のような状態であると想像することができる。

同様に、東西南北のそれぞれの相関フレーズの相同的な構造を検討することにより、東西南北のそれぞれの相関フレーズの理解をより明確にすることができるであろう。これについては次章にて述べる。

9. 相関フレーズの区画の枠を超えた相同構造：「相関フレーズの相同構造」

9.1. 東西南北の相関フレーズによる区画の枠を超えた相同構造

東西南北のそれぞれの相関フレーズによる「相関フレーズの相同構造」（図5）を以下に示す。

東の相関フレーズ（東1、東2、東3）による「相関フレーズの相同構造」

東1：「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」

東2：「東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ」

東3：「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」

西の相関フレーズ（西1、西2、西3）による「相関フレーズの相同構造」

西1：「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル」

西2：「西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」

西3：「サムサノナツハオロオロアルキ」

南の相関フレーズ（南1、南2、南3）による「相関フレーズの相同構造」

南1：「アラユルコトラ ジブンヲカンジョウニ入レズニ」

南2：「南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」

南3：「ミンナニデクノボートヨバレ」

北の相関フレーズ（北1、北2、北3）による「相関フレーズの相同構造」

北1：「ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」

北2：「北ニケンクワヤソショウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」

北3：「ホメラレモセズ クニモサレズ」

これらの「相関フレーズの相同構造」に基づくと、相関フレーズの理解がより明確になることについて次節に述べる。

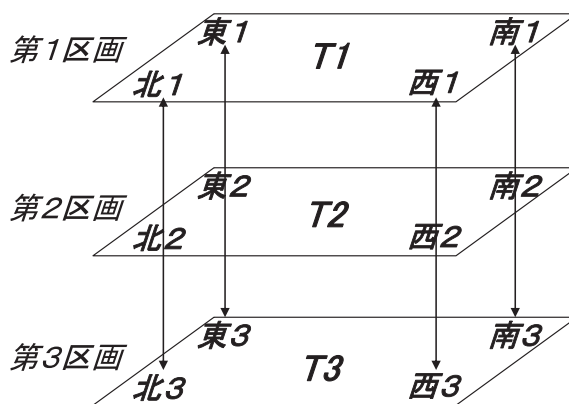


図5. 「相関フレーズの相同構造」

各区画内における東・西・南・北に位置する4つの相関フレーズが、それぞれ区画を超えて形成する相同構造

9.2. 「相関フレーズの相同構造」に基づく相関フレーズの解釈

東の相関フレーズは、第1区画の東1、第2区画の東2、第3区画の東3という区画を通じた相同構造を持っている。すなわち「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」(東1)、「東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ」(東2)、しかも「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」(東3)、の間には相同構造がある。それは、東の相関フレーズの、丈夫な体(東1)、看病の行動(東2)、共感的行動(東3)の各要素間に見られる積極性の展開という相同構造である。

西の相関フレーズは、同様に、区画の枠を超えて、第1区画の西1、第2区画の西2、第3区画の西3という区画を通じた相同構造を持っている。すなわち「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル」(西1)、「西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」(西2)、「サムサノナツハオロオロアルキ」(西3)の間には相同構造がある。それは、西の相関フレーズの、無私の穏やかな精神(西1)、繊細な支援行動(西2)、冷夏における為す術のないうつき(西3)、の各要素間に見られる繊細さの展開という相同構造である。

さらに、南の相関フレーズは、区画の枠を超えて、第1区画の南1、第2区画の南2、第3区画の南3という区画を通じた相同構造を持っている。すなわち「アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ」(南1)、「南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」(南2)、「ミンナニデクノボートヨバレ」(南3)の間には相同構造がある。ここでは、南の相関フレーズの、無私の存在(南1)、臨死期の看とり(南2)、みんなからの「デクノボー」の評価(南3)、の各要素間に見られる無私の展開という相同構造である。この相同構造に基づくと、みんなからの「デクノボー」の評価は、治すことができないために積極的な評価はされないものの、共同体を縁の下で支えている看取りの実施者に対する人々の評価を含むという理解が生まれる。

そして、北の相関フレーズは、区画の枠を超えて、第1区画の北1、第2区画の北2、第3区画の北3という区画を通じた相同構造を持っている。すなわち「ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」(北1)、「北ニケンクワヤソショウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」(北2)、「ホメラレモセズ クニモサレズ」(北3)の間には相同構造がある。それは、北の相関フレーズの、傾聴者(北1)、喧嘩や訴訟の仲裁(北2)、空気のような存在(北3)、の各要素間に見られる傾聴の展開という相同構造である。この相同構造において、傾聴者による喧嘩や訴訟の仲裁によってそれらが納まるべくして納まっても、傾聴者の介入はあたかも空気のようなものであると思われるために傾聴者は傍観者扱いされる状態にあること、それが「ホメラレモセズ クニモサレズ」の状態であることが示唆される。

10. 相関フレーズの区画の枠を超えた対角構造：「区画間の対角照応構造」

区画の枠を超えた相関フレーズの対角の構造は、隣り合った区画の間すなわち第1区画と第2区画の間および第2区画と第3区画の間における「区画間の対角照応構造」(図6)と、第1区画と第3区画の間の「区画間の対角照応構造」(図7)からなる。

10.1. 第1区画と第2区画の間の「区画間の対角照応構造」

第1区画と第2区画の間の「区画間の対角照応構造」を以下に示す。

東1：「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」

西2：「西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」

西1：「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル」

東2：「東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ」

南1：「アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ」

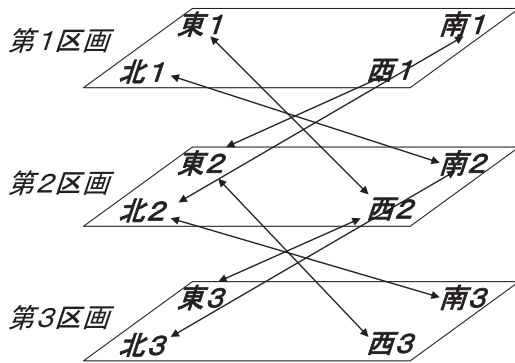


図 6. 「区画間の対角照応構造」 1.

隣り合った区画の東西の相関フレーズと南北の相関フレーズが形成する対角の照応的な構造

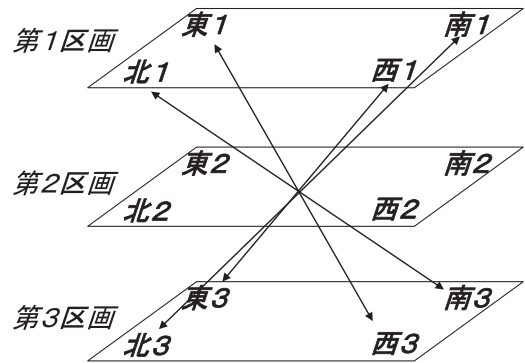


図 7. 「区画間の対角照応構造」 2.

第 1 区画と第 3 区画の間の東西の相関フレーズと南北の相関フレーズが形成する対角の照応的な構造

北 2 : 「北ニケンクウヤソショウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」

北 1 : 「ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」

南 2 : 「南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」

10.2. 第 2 区画と第 3 区画の間の「区画間の対角照応構造」

第 2 区画と第 3 区画の間の「区画間の対角照応構造」を以下に示す。

東 2 : 「東ニ病気ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ」

西 3 : 「サムサノナツハオロオロアルキ」

西 2 : 「西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」

東 3 : 「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」

南 2 : 「南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」

北 3 : 「ホメラレモセズ クニモサレズ」

北 2 : 「北ニケンクウヤソショウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」 (

南 3 : 「ミンナニデクノボートヨバレ」)

10.3. 第 1 区画と第 3 区画の間の「区画間の対角照応構造」

第 1 区画と第 3 区画の間の「区画間の対角照応構造」を以下に示す。

東 1 「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」

西 3 「サムサノナツハオロオロアルキ」

西 1 : 「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル」

東 3 : 「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」

南 1 : 「アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ」

北 3 : 「ホメラレモセズ クニモサレズ」

北1：「ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」

南3：「ミンナニデクノボートヨバレ」

11. おわりに

本論は、「雨ニモマケズ」における組織化された構造があることを実証する試みであった。その結果、「雨ニモマケズ」は、各区画に5つのフレーズを含む3つの区画からなる組織体 (organization) であると考えられた。この組織体の各区画内では、テーマフレーズを中心に4つの関連フレーズが東・西・南・北から取り囲むことで「テーマ関連構造」を形成する。東西の関連フレーズと南北の関連フレーズが、「対角照応構造」を形成する。さらに「雨ニモマケズ」の各区画は、進化論的概念の相同性 (homogeny) に基づいたつながりを持っている。すなわち各区画のテーマフレーズが、区画の枠を超えて「テーマフレーズの相同構造」を形成する。また、各区画内の関連フレーズは、区画の枠を超えて、東同士、西同士、南同士、北同士の間において、それぞれ「関連フレーズの相同構造」を形成する。そして第1区画と第2区画の間、第2区画と第3区画の間、第1区画と第3区画の間において、東西の関連フレーズおよび南北の関連フレーズは、それぞれ「区画間の対角照応構造」を形成する。

上述したように、谷川徹三は、「近代的個人主義文学におけるような発想と措辞を斥けたところに、この詩の精神の高さがある（注：傍点引用者）」こと、「ここには近代的現実感がないところに独自の超現実的現実感があって、その切実性がわれわれの心を動かす（注：傍点引用者）」ことを指摘した。進化論的構造を有している「雨ニモマケズ」の組織化された構造は、まさに近代的個人主義文学におけるような発想と措辞を斥けたところに見出され得る構造である。そして「雨ニモマケズ」に心を動かされた谷川徹三が、彼の心を動かしたが暗示するだけにとどまっていたその存在こそ、「雨ニモマケズ」のこの組織化された構造であると思われる。「雨ニモマケズ」は賢治の思念のエッセンスそのものであるとするならば、この「雨ニモマケズ」の組織化された構造は、賢治の思念のエッセンスがもっている構造である。それゆえに、このように組織化された構造という視点を持って賢治の他の作品にアプローチすると、本論の「雨ニモマケズ」の場合で示されたように、賢治の作品に新たな理解をもたらし得ることが期待される。

12. 要約

本論は、「雨ニモマケズ」における組織化された構造があることを実証する試みであった。その結果は、以下の通りである：全体としての「雨ニモマケズ」は、各区画が5フレーズからなる3区画で構成される組織体 (organization) である；「雨ニモマケズ」の各区画内においては、中心の1つのテーマフレーズを4つの関連フレーズが東・西・南・北から取り囲むことで「テーマ関連構造」を形成するとともに、東西の関連フレーズと南北の関連フレーズが、「対角照応構造」を形成する；「雨ニモマケズ」の3区画は、進化論の原則である相同性 (homogeny) を思わせるつながりを持っている：3つのテーマフレーズは、区画の枠を超えて「テーマフレーズの相同構造」を形成し、3つの区画の東、西、南、北それぞれ3つの関連フレーズは、区画の枠を超えて、「関連フレーズの相同構造」を形成する；さらに、第1区画と第2区画の間、第2区画と第3区画の間、第1区画と第3区画の間において、区画の枠を超えて、東西の関連フレーズおよび南北の関連フレーズは、「区画間の対角照応構造」を形成する。「テーマ関連構造」と「対角照応構造」に注意することで、「雨ニモマケズ」の各区画内の表現の新たな理解が可能になった。また、「テーマフレーズの相同構造」に注意することは、「雨ニモマケズ」の全体のテーマの発見を可能にし、また「デクノボー」の新たな理解を可能にした。「関連フレーズの相同構造」と「区画間の対角照応構造」に注意することで、関連フレーズのより広い理解が可能になった。組織化された構造という視点をもって賢治の作品にアプローチすることは、賢治の作品に新たな理解をもたらすドアを開くものと期待される。

引用文献

1. 小倉豊文. 宮沢賢治「雨ニモマケズ手帳」研究. 筑摩書房；東京：1996.
2. 谷川徹三. 宮沢賢治の世界. 法政大学出版会；東京：1970.
3. 廣瀬正明. 宮沢賢治「玄米四合のストイシズム」. 朝文社；東京：2013.
4. 渡邊 昌. 統合医療における総合栄養学（健康長寿をめざす食事）. In：統合医療 理論と実践 Part2. 実践篇. 統合医療学会；東京：2012. pp. 228-237.
5. 藤井義博. 大学生の食事と健康教育——「雨ニモマケズ」の生活法を教材として——. CAMPUS HEALTH 2014；51(2)：56-61.
6. 宮沢賢治. 1931年極東ビデテリアン大会見聞録. In：新校本宮沢賢治全集. 第10巻 童話III 本文篇. 筑摩書房；東京：1995. pp. 338-343.
7. 藤井義博. 宮沢賢治の聖い資糧——栄養療法の知的枠組についての研究10——. 藤女子大学紀要（第II部）. 2013；50：25-37.
8. 新渡戸稲造. 西洋の事情と思想. 新渡戸稲造全集. 第6巻. 教文館；東京：1970. pp. 437-646.

